

皮肉について

——『勝利』の一研究——

藤 原 洋 樹

岡山理科大学教養部

(1992年9月30日 受理)

序 論

世間一般から見れば、そもそも、小説そのものが〈あってもなくてもいいもの〉なのだから、小説についての野暮ったい評論やエッセイのたぐいは、五代目古今亭志ん生のいう〈なくってもなくてもいいもの〉であり、下町生れのぼくらの美意識からみれば、〈殆どあってはならないもの〉でもあって、隅田川おさかわへ打っちゃっちまいな、と吐きするようにな言いたいところである¹⁾。こういうふうに考えている人もあるのだが、人の書いた小説をこね回して、評論めいたことを書くのがなりわいの一部になっている私達にとっては、そうも言っておられない一種の宿命を背負っているのである。尚更「内容」にふさわしい「形式」を求めて苦惱していた小説家ジョセフ・コンラッド (Joseph Conrad) にとっては、小説を書くことが彼の生命の不可欠な一部をなしており、こういうふうに書かれることは心外なものもあり、又悲しくも感じられたことであろう。

さて、『勝利—ある島の物語』(Victory—An Island Tale) は、『運命』(Chance, 1913) の次に出版されたジョセフ・コンラッドの長編小説である。最初は1915年2月ニューヨークの「マンゼーズ・マガジン」(Munsey's Magazine) 54号に掲載、続いて1915年8月24日～11月9日の「ロンドン・スター」(London Star) に連載、書物としては1915年ニューヨークのダブルディ (Doubleday) 社から出版された²⁾。

『勝利』に対する批評家の評価は様々で、ほめる者もあれば、けなす者もあるという非常に評価の不安定な作品であり、現在もこの状態は変わっていない様に思われる。

この小説の最も納得できない点であり、又最大の弱点でもあると思われるのは、主人公ヘイスト (Heyst) は哲学者であった父親の影響を受け、世間を邪悪なものと見做して、「世間からの超脱」(detachment) こそが自分の生きる道であると思い込み、その思い込みに縛られている男であるという前提で話が進められているのだが、父親の哲学的思想も明確でなければ、ヘイストが何故それを無条件に受け入れることができたのかについても明確ではないという点である。この小論では、このあいまいさが何をもたらしているのかを探つてみたい。

本論

ヘイストの父親の哲学的思想については、ヘイストの思想を通して以外はほとんど語られていないが、ただわずかにその片鱗を、ヘイストが一つのあいまいな比喩を用いてリーナ (Lena) に説明している。

“....Suppose the world a factory and all mankind workmen in it. Well he discovered that the wages were not good enough. That they were paid in counterfeit money.”³⁾

そしてヘイストの父親は世間を軽蔑し、懷疑主義に陥ったのである。ヘイストは父親が亡くなるまでの三年間一緒に暮し、父親の影響を受け、父親の死後、彼の “Look on—make no sound,”⁴⁾ という忠告に従って、「世間からの超脱」を主義として各地を流れ歩く。ヘイストが父親の懷疑主義を何故無条件に受け入れられたのかについても、若くてどういう影響でも受けやすい年頃だったとしか述べられていないので、到底納得できる説明ではない。このことに関しては、幼くして両親とも失い、11歳で孤児となり、叔父のタデウス・ボブロフスキ (Thaddeus Bobrowski) のもとに身を寄せていた作者コンラッドの、親子の絆というものに対する観念的で偏執的な理想が、かなり大きな役割を演じているように思われる。

『勝利』は、こういうあいまいな前提のもとに物語が展開していくのだが、作品全体が四部から構成されており、第一部は正体不明の「私」という人物が語っているが、第二部以後は全知の語り手に交替している。この語り手の交替も、この作品の主題が主人公ヘイストの陥っている「世間からの超脱」と「世間にに対する同情」とのジレンマという心の問題であることを考え合わせれば、当然と言える。ただこの作品では、「外見 (appearance) と実際或いは現実 (reality) との齟齬」というものが重要な皮肉として用いられているので、コンラッドはその対照を強調するために、意識的に語り手の使いわけをしているものと思われる。第一部では世間という外側から見たヘイストが語られており、彼の言動に対する世間の反応が彼の様々な仇名となって、ヘイストは ‘Enchanted Heyst’ ‘Hard Facts’ ‘Utopist’ ‘Heyst the Spider’ と呼ばれる。又ヘイストの外見について、

At that epoch in his life, in the fulness of his physical development, of a broad, martial presence, with his bald head and long moustaches, he resembled the portraits of Charles XII, of adventurous memory. However, there was no reason to think that Heyst was in any way a fighting man.⁵⁾

と述べられているが、この記述は、ヘイストが肉体的にも「外見と実際との齟齬」をきたしているということを示していると共に、後にヘイストとリーナが住んでいるサンビュラン島に、ジョーンズ (Jones) とリカルド (Recardo) とペドロ (Pedro) の三人の悪漢が

やって来た時の、ヘイストの優柔不断な態度の伏線となっている。第二部になって、全知の語り手がヘイストとリーナの駆け落ちと世間で噂されている事件の真相を語り始めるが、次第に「世間からの超脱」と「世間にに対する同情」とのジレンマという主題が浮き彫りにされていく。

ヘイストは第一部第六章で、彼とリーナとの駆け落ちを手伝ってくれたショーンベルグ夫人(Mrs. Schomberg)のショールを彼女に返してくれるようデヴィッドソン船長(Captain Davidson)に頼んだ時に、いかなる行動もトラブルにつながるので、世間は邪悪なのだと述べる。

“....I suppose I have done a certain amount of harm, since I allowed myself to be tempted into action. It seemed innocent enough, but all action is bound to be harmful. It is devilish. That is why this world is evil upon the whole....”⁶⁾

又行動については、ヘイストは第三部第一章で、次のように考えている。

Action——the first thought, or perhaps the first impulse, on earth! The barbed hook, baited with the illusion of progress, to bring out of the lightless void the shoals of unnumbered generations!⁷⁾

この行動ということに関して、コンラッドの後期の作品を高く評価している批評家の人である Gary Geddes は、評価の低い他の批評家の非難に対し、コンラッドは後期の作品において社会的行動という問題に関心を抱いているのだと主張している。

...., Conrad is not suppressing his awareness of evil, or of the complexity of human motivation; rather, he is allowing his psychological impulse to find a more generalized expression in work that is concerned with problems of conduct in society.⁸⁾

ヘイストはこういう邪悪な世間の中で生きることを拒否して、「世間からの超脱」を主義としているが、この主義に徹することができず、二度だけ「世間への同情」を示してしまう。同情ということについては、第三部第一章で、ヘイストは行動について考えたすぐ後で、父親が死を真近にして、自分に一つの忠告を与えてくれたことを思い出す。

“You believe in flesh and blood, perhaps? A full and equable contempt would soon do away with that, too. But since you have not attained to it, I advise you to cultivate that form of contempt which is called pity....”⁹⁾

しかしへイストは二度とも父親の忠告してくれた pity という軽蔑の気持ではなく、同情(sympathy)を感じ、相手の窮状を救うため、行動にのめり込んでいってしまう。最初の

モリソン船長 (Captain Morrison) の時は、モリソンがポルトガルの官憲から書類不備のため罰金を科せられ、それが払えない場合は彼の船が没収されるというので全く困り果てていたところを、ヘイストが罰金を払って助けてやる。モリソンはこのことでヘイストに対して大いに恩義を感じ、自分の船に同乗することを要請し、交易して得た利益の中から借りたお金を返す事をヘイストに納得させる。その後モリソンは島々に眠る石炭の開発を思い立ち、石炭会社設立のためイギリスに帰国するが、やがて病を得て死んでしまう。ヘイストは自分が「世間からの超脱」という主義に背いて、モリソンの窮状を救うという行動を起こしたことに対して挫折感を抱くとともに、モリソンが死んだのは自分の責任であるかのように、一つの心の傷として感じている。このヘイストとモリソンの関係は、ヘイストのなんの下心もないモリソンへの同情から始まったものだが、ホテルを経営するショーンベルグという男が、ただ自分のホテルを使ってくれないというだけの理由でヘイストを嫌い、ヘイストはモリソンの金を奪ってから故国に追い帰し死なせたのだという中傷を、自分のホテルの客の間に流す。ヘイストはその中傷について、後にリーナの口から聞き、苦い思いをする。

このショーンベルグという男は、人間的にはいやらしくつまらない男であるが、三人の悪党をうまくだまして、ヘイストとリーナの住むサンビュラン島へ追いやる役目を果たしているので、この作品の展開のうえでは重要な役割を持った登場人物である。又この作品の「勝利」という題名に関して、これは誰の勝利を表わしているのか大きな問題であるが、一つの解釈としてショーンベルグの勝利だとも言えるのではないだろうか。と言うのは、ショーンベルグは自分のホテルには邪魔な客である悪党達をだましてヘイストのもとへやり、その結果ヘイストは死んでしまう。従ってショーンベルグは、自分の手の中からリーナを奪った憎いヘイストへの復讐を果たしたことになるからである。

ヘイストが二度目で最後に世間に対して同情を示すのは、この作品の女主人公であるリーナに対してである。リーナは「ザンジャコモ女性楽団」と称する旅回りの一團のバイオリンを担当していた座員であり、ヘイストがたまたま投宿していたショーンベルグのホテルで演奏していたのである。ショーンベルグは自分のホテルの客の無聊を慰めるために、演奏の合間に座員達に客の間を回って相手をさせていたのであるが、それをいやがって舞台に残っていたリーナが、ザンジャコモ夫人 (Mrs. Zangiacomo) に腕をつねられて、しぶしぶ舞台から下りて来るのをヘイストが目撃し、モリソンの時と同じ衝動をおぼえ彼女に話しかける。彼女の窮状を知り同情するが、同時に彼女の魅力—特に声のすばらしさ—に引きつけられる。そして結局、ヘイストはある夜駆け落ちするような形で、リーナを自分の住むサンビュラン島へ連れて逃げるのである。第一部の語り手とデヴィッドソンとは、この行為が「駆け落ち」ではなく、本質的には「窮状に陥った人の救出」であるという事に意見が一致するが、「世間からの超脱」を主義としている人間が、他の人間を救出するというのは、全く皮肉な状況だと言える。

ヘイストの二度にわたる「世間に対する同情」は、「世間からの超脱」という彼の個人的規範から判断すれば、それからはずれた行為であり、彼を挫折感で苦しめることになるが、人間としての一般的規範から判断すれば、一人の人間として正しい行為であり、賞賛に値する立派な行為である。コンラッドは、これまでの作品の中で、「人間の絆」(human solidarity)というものが、人間が社会の中で生きていくうえで、非常に大切な規範であるとして、特に『ロード・ジム』(*Lord Jim*, 1900)と『西欧人の眼の下に』(*Under Western Eyes*, 1911)においては、この規範を破って「裏切り」という行為を犯した二人の主人公を厳しく罰している。しかし「世間からの超脱」という個人的規範を守ろうとしているヘイストにとって、この「人間の絆」という一般的規範は当然排除すべきものであるが、何故かあいまいである。と言うのは、第三部第三章で、ヘイストはリーナを島の小高い丘の上に連れて行って、彼女にモリソンとの関係を説明した後で、

“....One gets attached in a way to people one has done something for. But is that friendship? I am not sure what it was. I only know that he who forms a tie is lost. The germ of corruption has entered into his soul.”¹⁰⁾

と述べて、「人間の絆」というものに対する不信を表明しているのだが、同時にこれまで経験したことのないほど、リーナが自分に現実の存在感を与えてくれると感じており、又第二部第二章で、ショーンベルグのホテルでの演奏の合間に二人が話している時に、リーナから故国イギリスに帰っても行く所がないと聞かされて次のように感じる。

....Heyst seemed to see the illusion of human fellowship on earth vanish before the naked truth of her existence, and leave them both face to face in a moral desert as arid as the sands of Sahara, without restful shade, without refreshing water.¹¹⁾

全知の語り手は、まるでヘイストが「人間の絆」を信じているかのような言い方をしているが、「世間からの超脱」という個人的規範を守ろうとしているヘイストが、こういう気持ちを抱くとは到底信じられない。これはやはり結局は、ヘイストの懐疑主義の前提となっているものが、あいまいであることから生じている皮肉な状況だと思わざるをえない。

この作品においては、「外見と実際或いは現実との齟齬」が重要な皮肉として用いられている。一見何の関係もない、無駄な記述のように思われるが、作品の冒頭には、それを象徴するかのように、石炭とダイヤモンドには非常に密接な化学的関係があると述べられている。ヘイストの肉体的外見と実際の齟齬については前に引用したが、彼は『ロード・ジム』の主人公ジムとか、『西欧人の眼の下に』の主人公ラズモフ (Razumov) とは異り、極限状態に置かれても自己防御本能が働く、自ら三人の悪漢に手を下すことをためらい、実行に移せないのである。コンラッドは、このヘイストの優柔不断な態度に関して、『勝利』

につけた「著者の覚え書き」(Author's Note) の中で、ヘイストは自己主張の習慣を失ってしまったのだと述べている。

....Heyst in his fine detachment had lost the habit of asserting himself. I don't mean the courage of self-assertion, either moral or physical, but the mere way of it, the trick of the thing, the readiness of mind and the turn of the hand that come without reflection and lead the man to excellence in life, in art, in crime, in virtue, and for the matter of that, even in love.¹²⁾

極限状態を意識するということは、日常の生活にどっぷりつかっていて、日常性をもはや意識しなくなっていることから生じる。懷疑主義者ヘイストは「世間からの超脱」を主義としているので、日常性を意識的に拒否しているわけである。従って彼にとっては、極限状態も極限状態とは感じられず、自己防御本能も働かなかったのではないだろうか。リカルドとジョーンズは、それを本能的に感じ取り、ヘイストは tame ではないと述べている。

さらに、ヘイストとリーナが、ショーンベルグのホテルから逃亡した時に手伝ってくれたのは、意外にもショーンベルグ夫人であり、第一部第七章で、デヴィッドソンがヘイストに頼まれて、ショーンベルグ夫人に彼女のショールを密かに返しにホテルに行った時に、彼女の「外見と実際との齟齬」について賞賛の気持を隠せない。

As to Mrs. Schomberg, she sat there like a joss. Davidson was lost in admiration. He believed, now, that the woman had been putting it on for years. She never even winked. It was immense! The insight he had obtained almost frightened him; he couldn't get over his wonder at knowing more of the real Mrs. Schomberg than anybody in the Islands, including Schomberg himself. She was a miracle of dissimulation. No wonder Heyst got the girl away from under two men's noses, if he had her to help with the job!¹³⁾

「外見と実際或いは現実との齟齬」という皮肉は、この作品のあいまい性を深めているが、外見を見て物事を判断する場合、人によって受け取り方が異なるということにもつながっている。第三部第八章で、三人の悪漢がサンビュラン島にやってきた後、ヘイストはリーナの待っているバンガローに戻ってくるが、リーナには三人がやって来たということは話すまいと決心し、次のように考える。

There is a quality in events which is apprehended differently by different minds or even by the same mind at different times. Any man living at all consciously knows that embarrassing truth.¹⁴⁾

物事に対して偏見を持たず、明確に判断し、事実 (fact) の裏にある真実 (truth) を感

じ取ることの難しさを述べているわけであるが、これは反面「世間からの超脱」を主義としているヘイストの心の揺れを表わしていると思われる。ヘイストの心の中における「世間からの超脱」と「世間にに対する同情」とのジレンマは、人間の理性と感情との間のどうしようもない乖離を示しているが、又同時に、作者コンラッドの作家としての心の揺れをも暗示しているようである。

ヘイストの内的葛藤は、他面において、明らかに美学上の問題を劇化している。

その問題とは、あらゆる芸術家が直面しなければならない、「芸術のための芸術を選ぶべきか、それとも社会意識を選ぶべきか」という問題である。¹⁵⁾

自分自身痛風に苦しみ、家族の病気にも悩まされていたコンラッドは、お金の必要性を痛切に感じており、自分の作品があまり大衆に受け入れられず、売れないということに悩んでいたので、この問題は彼にとっては深刻なものであったに違いない。

結 論

ジョセフ・コンラッドの後期の作品である『勝利』の主人公ヘイストは、懷疑主義に陥っているが、その理由もその内容もあまりにもあいまいである。彼は父親の教えに従って「世間からの超脱」を主義としていたが、不覚にも二度だけ「世間への同情」を示してしまい、挫折感に苦しむ。「世間からの超脱」はヘイストの個人的規範であり、コンラッドがこれまでの作品の中で重要視している「人間の絆」という一般的な規範とは、当然相反するものであるが、ヘイストのこの二つの相反する規範に対する態度が非常にあいまいである。このあいまいさは、結局彼の懷疑主義のあいまいさから生じた皮肉な状況であり、又同時に作者コンラッドの作家としての、美学上の問題を暗示している。

又「外見と実際或いは現実との齟齬」という皮肉が、この作品全体を支配しており、作品全体のあいまい性を深めている。

Notes

- 1) 小林信彦『小説世界のロビンソン』、新潮文庫、新潮社、平成4年、p. 11
- 2) 『20世紀英米文学案内3 コンラッド』、中野好夫編、研究社、1966、p. 146
- 3) Joseph Conrad, *Victory—An Island Jale*, J. M. Dent and Sons Ltd., 1967, pp. 195—196
- 4) Ibid., p. 175
- 5) Ibid., p. 9
- 6) Ibid., p. 54
- 7) Ibid., p. 174
- 8) Gary Geddes, *Conrad's Later Novels*, McGill-Queen's University Press, 1980, p. 3
- 9) Joseph Conrad, op. cit., p. 174
- 10) Ibid., pp. 199—200
- 11) Ibid., p. 80

- 12) Ibid., Author's Note, p. x
- 13) Ibid., p. 59
- 14) Ibid., p. 248
- 15) フレデリック・R・カール『ジョウゼフ・コンラッド』, 野口啓祐・野口勝子共訳, 北星堂書店, 昭和49年, p. 325

On the Irony in *Victory*

Hiroki FUJIWARA

Faculty of Liberal Arts and Science,

Okayama University of Science

1-1 Ridai-chō, Okayama 700, Japan

(Received September 30, 1992)

Heyst, hero in *Victory*, is a skeptic who, in spite of his detachment from the world, is frustrated because he feels sympathy for it. It's just an ironical situation. And the irony of the difference between appearance and reality deepens the ambiguity of this piece of work.